
機動戦士ガンダム00 ~ The Last Delta ~

ボンズリ・アルマーク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダム00 〈The Last Delta〉

【Nコード】

N7413X

【作者名】

ボンズリ・アルマーク

【あらすじ】

二十三世紀前半、地球上に初めてELSが来訪してから歩み始めた、ガンダムマイスター達のもうひとつのストーリー。

先導者の来訪

回る、回る、落ちて行く。

空の大地と地上の大地が視界を包む。

ちっぽけな存在である私は、漠然とした空間向けて飛びこんで行く。

もつどつちが空でどつちが地上かもわからない。

無数の思考が生まれては消え、生まれては消える。

風が体を叩き、服を揺らして耳障りな音を立てているのに気付いた。

突然、大地を黄金色の光が照らす。

隔離されたこの空間が、一気に広がった。

太陽という名の神々しい光の塊が、海と空をはっきりとさせたのだ。

東を向き、金色の光を目の当たりにする。

そして、その光を遮るように現れる存在も。

「機動戦士ガンダム00 The Last Delta」

世界には六十年前から、ギロチンの刃が下ろされている。
今だ首が飛んでいないのは、多分刃が届いていないからだろう。
猶予の与えられた、既に死ぬ事は決定した様な世界で、人類は歩
いていた。

そんな実感も何も無い、それでいて世界の姿はぼんやりと知って
いる少年が二人。

一方は台所でフライパンを振っていて、一方はソファの上に寝っ
転がったまま天井をぼーっと眺めていた。

「ねえ刹那。今日は夕飯、食べて行くのかい？」

「……………どうだろうな」

「ルイスも来る。出来るだけ賑やかな方が僕は好きなんだけど」

「あいつ一人いればパーティー会場だろう。それに、俺がいても場が
盛り上がると思えない」

言いつつ帰る気配のない刹那という少年を眺めながら、沙慈・ク
ロスロードはプツ、と噴き出した。

それに気付いた刹那の視線を流しながら、沙慈はフライパンを持
つ手を再び動かし始める。

そんな二人の間に、一つの甲高い声が割り込んできた。

「やつほー！ 沙慈、刹那！」

「相変わらずうるさい女だ……」

「アンタも、相変わらず無愛想ね」

「会ったび会ったび、本当に飽きないね二人とも」

苦笑いをしながら、フライパンに乗った物をひっくり返す沙慈。
一時期アルバイトを幾重にも渡って行っていたらしく、そのときに
様々なスキルを身に着けたらしい。

「絹江・クロスロードはまだ帰らないのか？」

「姉さんは暫く出張。地球に降りるんだってさ」

「カメラマンも大変ねえ……」

「記者だけどね」

あんな変わらないじゃない、と笑い飛ばすルイスの言葉に浅く溜
息を吐く沙慈。ここに姉がいなかった事を神様に感謝している真っ
最中だったりする。

彼ら三人は共に同じ学校へ通う生徒で、クラスメイトで、親友と
呼ぶべき関係だ。このくらいの関係は至極当たり前で、日常的。

沙慈が調理し、その間に刹那とルイスがゲームの類を弄くる。毎
回毎回ルイスの悔しそうな声が聞こえるのだが。

そして今回もその声が聞こえた。うだー！ と声を上げた少女は

沙慈の背中に飛び付き、につくきあんちきしょーを指差す。

「手加減しなさいよ！ この全身チート野郎！」

「手なら抜いている」

「むきーっ！！」

「刹那……」

「だから、手加減ならしていると……」

この流れも……… まあ、日常茶飯事と言えよう。

お祭り騒ぎの過ぎた夜更け。ルイスが沙慈の家に泊まると言いだし、苦笑いしながら彼自身もそれを承諾。

当然刹那も一緒にと言われ、渋々それに付き合う事にした。

既に人工太陽は陽の光を発しておらず、辺りは夜の暗闇に包み込まれている。

そんな中、刹那・F・セイエイは一人歩いていた。近くのコンビニまで飲食料の買い出し、と言えればいいのだろう。

最初は三人で行こうと言っていたのだが、刹那が「夜闇に女性を連れ出すのは危険だろう」と進言し、一人拾い道路道を歩いていた。

「……………静かだな……………本当に……………」

今が人類史上最大の戦乱に陥っているとは思えない程、このコロニー内には静寂が広がっていた。

動物が鳴けばそれだけで体がビクついてしまいそうな。それでいて落ち着いた空間。

息のつまりそうな隔離されたスペースコロニーでも、こんな顔を見せる事が出来るのだが、とばやく刹那。

人工太陽をぼんやりと眺めながら歩いていた刹那。

油断だらけ隙だらけ。今ナイフを持って突っ込まれれば、などと考えていると、突然正面から何かと当たってしまった。

勢いのついた衝撃。走っていたらしく、刹那自信も思わず尻餅をついてしまった。

倒れ込み、暗がりによく見えない何かが起き上がる。

「じ、ごめんなさい……………」

「い、いや、俺も前を見ていなかった。お互い様という奴だ」

起きあがった少女は、大きなフードの付いたパーカーを着ていて、街灯に照らされても顔が薄らと見えるだけで髪がどうなどという事は全く分からなかった。

多分、女性だと思う。

「どうした？　こんな時間に女性が一人で……」

「え、えっと……… すいません、私急いで……」

そう言い残し、去ろうとする少女。

しかし、次の瞬間にハッと表情を変化させ、危険を危惧する言葉と共に再び刹那を押し倒した。

両者先程のように地面に倒れ込んでしまう。

直後、音を抑えた弾丸を放つ音が聞こえた。

恐らく、先程まで刹那がいた場所を通過したのだろう。街灯の一本に命中し、甲高い金属音を立たせる。

「お……わ……………?!」

「もう追手が……」

意味深な言葉を発する少女の顔と、弾丸の弾けた街灯を交互に見ながら、刹那・F・セイエイは状況を静かに分析し始めた。

そして、辿りついた結論は……舌打ち。

無駄のない動きで素早く立ちあがり、少女を連れて薄暗い道路を駆ける。

途中何度か銃口が鳴らす独特の音が聞こえた。しかし止まらない。そもそも街灯の下を避けて歩けば、こんな最悪の状況下で銃弾など当たる筈などないのだ。

宵闇が広がる路地裏に入り込み、複雑な道をあちらこちらへと曲がって曲がって曲がり通すと、ようやく一息吐いた。

後方に人の気配が無い事を確認すると、刹那は壁に背中を預けて両手を組んだ。

面倒な事になった、と呟いて溜息。更に帰りが遅くなりそうなことに溜息。

そして最後に、菓子類を買って帰るのが遅くなってしまい、ぷんすか怒るルイス・ハレヴィの姿を想像して深々と溜息を吐いた。

（それを宥めるのは、沙慈なのだがな……）

薄ら笑いを浮かべると、暗闇の中空を見上げた。暫くして顔を少女の方に向けて歩み寄る。

まだ肩で息をしている。運動慣れしていないのだろうか？

それとも、長く重力のない空間で過ごしていた、か……。

「何故追われていた。警官に職務質問をされた、などという枠に収まる物でもないだろう……？」

刹那が静かに問い掛けると、フードを深く被った少女は舌唇を噛んで、フードを両手で引っ張り上げて小さくうずくまる。

まるで、何かに怯えている様に見える。何も言わない少女の様子を見て、再び小さく溜息を吐いた。もしも溜息で幸せが逃げると言うのなら、今ここでコロニーに穴が空くくらいの運になっているだろう。

という事は、あの言葉は迷信か……。

などと心底どうでも良い事実を発見した刹那は、壁と地面の隙間に入り込んでしまいそうな程に蹲っている少女の目の前にしゃがみ込んだ。

「多分、信じてくれないと………と思う………」

「信じる」

「……………」

多分、彼女は最初から刹那が彼女の言葉を信じる、ということとは分かっていた。

その上で怯えていた。つまり、自分の抱え込んでいる物を他人に話してしまったら、自分に危害が加わると考えたのだろう。

初対面の人間に対してそんな警戒心を剥き出しにすると言うことは、恐らく今までも何度かそういう経験があったのだろう。

（人間不信……か）

街灯の並ぶ道路のど真ん中を、六人の男が忙しなく走り回っていた。

各々が地味で風景に溶け込む事を目的とした服装をしていて、まるでスパイのような雰囲気だ。

しかし、現在彼らが行っているのはそんなレベルの物ではない。言葉にすれば「人を運んでいた」とだけ言えればいい。しかし、事

はもつと複雑に動いている。

彼らが運んでいた人間は常人ではなく、使い方を考えればコロナ側の切り札に成り得る「兵器」に近い。

それは、ついこの間までは義理の家族たちと共に平和に暮らしていた、ただの少女で。

偶然の検査によって、常人と掛け離れた能力を持っている事が判明し、そして軍の人間に隔離される存在になり変わってしまった。

悲しい子供。誰もがそう呼んだ。

しかし、彼女の能力は非常に魅力的で、しかもかつて妄想だと謳われていたイオリア理論を体現した存在でもある。

これをモビルスーツに乗せて前線で戦わせれば……。

「近くにはいないな………仕方ない。モビルスーツの使用を許可する。待機隊はコロナー内に侵入し、生体データをモニターに入力して広域探知を行え。我々はこのまま探索を続ける」

不気味なほど規則正しい仕草を返す男たち。

闇に溶け込むようにして、彼らの姿は次第に消えて行つた。

「遅いね、刹那……」

「何やってんのよー……」

ソファに座りこんでいる二人の男女が、呆れるたように呟いた。
そこには本来既に帰って来ている筈の少年の姿がなく、異様な空
白感が頭の中をふわふわしている。

寡黙で無愛想でも、彼の存在が大きいことを思い知らされる沙慈
とルイス。

「携帯も繋がらないし……」

「……………何か変な感じ」

「何が？」

「分かんない。昨日、コロニー内に輸送船が着艦したでしょ？ そ
れから何か……何だろ。よくわかんないけど、変な感じがするの」

霧のように掴めず薄く広くぼんやりしたルイスの言葉に、沙慈は
うつん?? と更に疑問符を頭の中で浮かべる。

ルイス自信もよく分かっていないらしく、ちよいちよいとテレビ
のリモコンを弄ってチャンネルを変え続けていた。

世界観

世界観

西暦

2246 ELSが初めて地球圏に来訪。旧世代MSで迎撃するが、地上の兵器七割の損壊。同時に、これを機に三大国家である「AEU」「人類革新連盟」「ユニオン」が「地球連合」と、一つにまとまる。

2265 謎の組織ソレスタルビーイングによって太陽炉技術が政府に提供され、エース機へ試験的に疑似太陽炉が搭載され始める。その二年後、木星へオリジナル太陽炉を製造する為の技術者が、疑似太陽炉搭載型モビルスーツ二十機と共に地球を出発。

2275 世界の歩幅も大きく変わり始めた頃、再びELSが地球に来襲。疑似太陽炉搭載型量産モビルスーツが前線で活躍し、被害は三十年前の約三分の一に治まった。

2280 木星から報告。現段階でオリジナルの太陽炉は約六基。政府から帰還命令を出され、長期宇宙航行艦「ベルウェザー」が地球への帰還ルートに入る。

2295 「ベルウェザー」が帰還。オリジナル太陽炉六基が軌道エレベーターを経由して地上に送り込まれ、それを利用したモビルスーツの製造が始められる。

2298 四機の”ガンダム”と呼ばれるモビルスーツが誕生。

2303 ELSが再び地球に襲来。ガンダムを含め、太陽炉搭載型量産モビルスーツ、その他にエース専用機が討って出る。結果ELSを殲滅。

2304 ELSによる被害で崩壊寸前だったスペースコロニー「ルミナス」の修復するための人員を、コロニー側が地球の連合に要求。しかし、地球の被害も大きく、とても人を手放せる状況ではないと言われ却下。結果、住民避難も間に合わず「ルミナス」は宇宙空間で崩壊した。

2305 コロニー側が連合に敵対意識を持ち始める。

2306 コロニー側のテロ組織が、突発的な電撃作戦で起動エレベーター三つを全て破壊。結果、宇宙移民と地球連合で完全な対立が表に現れた。

イオリアによる先導者と革新者

一つ目に、地球の重力を振り切り、宇宙の本質に触れて特別な感性を持った先導者の出現。

二つ目に、太陽炉から発せられる「GN粒子」の刺激で、宇宙に対して大きな適正を持つ革新者の出現。

両者とも未だに確認されておらず、夢物語として語り継がれている。

教科書にも登場するレベルで普及した話であり、知らぬ者は殆どいない。

E L S

共通して擬態能力のみを有しており、浸食能力は持っていない。

第一次E L S戦 構造が100パーセント金属で、円錐状で突撃攻撃を仕掛けて来る。無尽蔵とも呼ぶべき数で攻めて来て、人類に大規模な攻撃を加えた。

第二次E L S戦 クモのような姿をした個体が現れ、中には旧世代M Sの姿をした物まで出現した。

第三次E L S戦 旧世代M Sと昆虫を足して二で割った様な姿をした個体が殆どで、それ以外はすべて初期の円錐形状の物ばかり。機動力は太陽炉を載せたM Sと同等か、それ以上。

鼓動のコロニー

暗黒の空間で、一つ佇む大きなモビルスーツ。

無機質な両腕に持った大砲のような兵器を連結させ、胴体の動力源と直結して目の前のコロニーへ向ける。

強固な装甲で固められた”特別な”モビルスーツ。緑色の輝きを背部から放出しつつ、大口径の砲門の照準を精密に……。

コクピット内で無表情の少年が鋭い眼差しで、照準カーソルを睨む。

「イオリアの提唱した、先導者が………くだらない……」

機体が赤く輝き始め、砲門から巨大なピンク色の球体が出現した。それは瞬く間に体積を増し、一機にモビルスーツ大にまで肥大化する。

「圧縮率77%………GNバズーカ、発射まで………0500」

虚空の宇宙に、

一際輝く赤い星の名は………。

街灯と住宅から放たれる僅かな光で照らされる、一つの道路。
とあるアパートから一番近いコンビニまで続く道を、一組の男女が歩いていた。

一方の名は沙慈・クロスロード。もう一方の名はルイス・ハレヴィ。
イ。

「ルイス……………そんなにくっ付かれると歩きにくいんだけど……………」

「だ、だって……………お化けとか出たら、直ぐ沙慈に守って貰えるように……………」

「怖いなら家に残ってれば良かったのに」

「沙慈がいるから怖くないわよ！」

「嬉しいけどさ……………」

沙慈の腕は自分専用とでも言わんばかりに抱き付いているルイス。
歩きにくい事この上ない沙慈にとっては、嬉しいやら辛いやら。

現在彼らは、一時間経ってもコンビニから帰ってこない刹那を捜

しに、家から少し出ている所だ。

普通なら二十分くらいで二往復は出来るのだが……。

寄り道云々も考えたが、流石にそんなに道草を食っているとは思えない。

どうするかと悩み抜いた結果、自分が辺りを一通り捜して回ろうという事になったのだ。

当然ルイスも着いて来ると言いだし、今に至る訳であつて。

宵闇の広がる路地裏をチラリと見ながら、沙慈はさぞかし下らなそうに溜息を吐いた。

そして、空を仰ぐ。そこに月が在る訳ではない。メカメカしい人工太陽が存在するだけ。

のんきだ。

今人類は、コロニーと地球。その二つに分かれて火花を散らしていると言うのに、このコロニーはまるでその状況を理解していない。平和ボケした人類は自分たちのように友人の家へ泊まったり、食べ物がないからと言って歩いて家を出る。

そんな自分たちが怖い。いつか敵のスパイが侵入し、銃を持って暴れたり、ナイフを持って走り回ったりしたらどうなるか。

今の怠けた空気ばかり吸っていると変になりそうだ。

少年が一人、空を見上げる。

回る筒の中で、何かを叫ぶ。

心の衝撃は宇宙を響かせ、いつか何かを彼に見せるだろう。

従来のモビルスーツでは考えられない程の粒子を蓄えた、膨大なエネルギーを誇る巨大な光球が眩い光を放った瞬間。操縦桿を握っていた少年が瞳を閉じ、力強く開く。

それは開始の合図。

ここから再び、「ガンダム」の歴史が始まる。

世界の中で戦争の道具として使われてきた「ガンダム」が、これからどうやって、どうしながらその名を示し続けるのか。それが、試される。

「GNバズーカ……ハイパーバーストモード……………」

スイッチを押すと同時に、機体のフェイスに存在する二つのメインカメラが、音を立てて輝いた。

「圧縮粒子、解放」

それは、人が住むために在る「スペースコロニー」へ向けて放たれる規模の攻撃ではなかった。
基地攻略に支援攻撃として、はたまた先制攻撃として放つ戦略レベルの超撃。

回転する眩い光は、

シリンダー状のスペースコロニーの外壁を削り取った。

沙慈が刹那を捜しにマンションを出た頃、当の本人は一人の少女と共に路地裏を出る為に右往左往していた。
道は覚えているため、迷う心配性は皆無だ。

「やっと出た、な……………」

「え、えと……………ありがとうございます……………」

「いや、気にしなくてもいい。それよりこれからどうするんだ？
今から一人で歩いても危険だろう？」

言われた少女は暫く俯いていたが、ふと、顔を急に上げた。
まるで、何か危険を……、

「走って!!」

「？」

「早く!!!!」

少女に腕を引っ張られ、言われるがままに足を動かす刹那。
直後、道路を一つの轟音が包み込んだ。街灯に照らされる無機質
な姿。

それは本来、このコロニー内に在る筈のない者。

道の脇に植えられた木々が振動し、草を僅かに散らせた。

「アヘッド……なぜモビルスーツがこのコロニーに……?!」

「逃げない」と!

どこへ逃げるといいのか。もしこれが追手ならば、もう自分たちは
積んでいえると言える。

これ以上逃げたって無駄だ。いや、これ以上逃げればもっと面倒
な事になるだろう。

ここは諦めて……。

いや……………違う。

「掴まれ！」

「え ひゃあ?!」

勢い良く少女の膝を抱え上げ、背中を手で支える。

こういう抱え方をルイスがなんたら抱っこと言っていた記憶がある。

刹那は自分に失望した。

例えば先の見えない場所に立っても、一度「自分を信じる」と言った相手を置いて諦めようとしたのだから。

男どころか、人間としての尊厳を失う所だった。

信頼を得るのは難しいが、その信頼を壊すのは簡単だ。
だから、

彼はたった一人の少女の信頼を護る為に動きだした。

街道の続く道路を走って、ひたすら道を進む。

(この先……………確か、輸送船のドッグだったな……………)

昨日、物資の供給と言う名目でこのコロニーに着艦した輸送船。
もしかしたら、それは彼女をここ運ぶための……………。

もしそうなら辻褄が合う。昨日まではこんなモビルスーツが現れるような事はなかったのだから。

「このまま輸送船へ……」

「……何か在るのか？」

「はい、多分……」

多分、か……。

曖昧な言葉だが、これを信用しなければ、多分自分は一生彼女の信頼を得られないだろう。

此処まで固執する必要がどこにある。そんな疑問も忘れたまま、モビルスーツを巻く為に彼はクモの巣を縫うような裏道へ消えて行った。

サイレンの鳴り響くコロニー。警報を聞いた人々が飛び起き、避難誘導に従ってシェルターへと向かっていく。

コロニー内には数機の敵側モビルスーツ、アヘッドが侵入してい

て市民もパニック状態に陥っていた。

そんな中、他の者達とは全く違う事を目的とした一組の男女が。

「刹那は……クソッ！ 避難したのか？！」

「早くしないと、シエルターが……」

「分かってるよ！」

親友の名を叫ぶ少年、沙慈・クロスロードは、人の波に逆らいながら群衆の中から抜け出す。

このまま闇雲に搜したって見つかるとは思えないし、自分に着いて来てくれるルイスを避難させるためにも……。

沙慈がルイスと共にシエルターへ避難しようとした瞬間。

まだ閉ざされていなかった隔離シエルターが、赤い光によって焼き尽くされた。

体が大きく吹き飛ばされ、ビルの外壁に激突してしまう。肺から酸素が押し出され、凄まじい熱風で体がチリチリと痛みだした。

気付いたときには、既に無人の空間。

文字通り、「消滅」したのだ……。

人が、

「なん……こんな、あつさり……人が…………」

守れたのは、本当に守りたいと思った一人の少女だけ。

今は気絶している、腕に抱いた長い金色の髪を持つ少女。

残ったのは命を奪う炎だけ。赤く変色したシエルターの入り口は、既に人が存在することが不可能なのは明白だった。

何もできない無力な自分の腕を見て、彼は。

「人が……………人が死んで、良いのかよおおオオオオオオ！！！！」

初めて、力が欲しいと感じた

。

第六番コロニー「スロップヒル」

輸送船ドッグ。

ごちゃごちゃした機械類は現在操作されておらず、人の気配もほぼなかった。

そこへ、一組の男女が入り口付近の安全を確認しながら、素早くドッグ内へと入って行く。どうやらこの辺りは無重力状態になっている様だ。

慣れない無重力空間で体勢を安定させつつ、少女の手を取って奥の方へと進んで行く。

途中パネル式の電子ロックが掛かった扉が在ったが、全て彼女が解いてしまった。どうやら、ここからこのコロニーに入ってきたのは間違いないらしい。

暫く進むとエレベーターの扉の前に出て、少女が警戒する事無く中へ入って行ったので、刹那も滑る様な足つきで入る。

ボタンは地下三階。エレベーターが下へ動き始めると、一気に外の世界が広がった。

「?! コ、コロニーが!!」

食いつく様に障壁の向こうを睨み、額を壁に押し付ける。

崩れた建物を踏みつぶして行くのは、連合軍所属モビルスーツ「アヘッド」。

それも、先程刹那たちが追われた二機だけではない。ここから見て分かるのは……総数六機。

二個小隊レベルを、民間コロニーとして知られているこの「スロップヒル」に派遣した。つまり、それ程の危険性または利益損益を、この少女が秘めていると言う事なのだろうか……?

「チッ……………すまない、向こうに友人がいるんだ。ここからは……」

「大丈夫……だよ」

?

話の歯車が噛み合っていないのだろうか？

一瞬口から疑問の言葉が漏れそうになるが、それを遮って少女は言葉を続けた。

「あなたが今、必要としているモノが………この先にあるから」

エレベーターが目的の階へ到着すると同時に、刹那は少女に腕を引っ張られて室内から飛び出した。

そこには昨日着艦したとされている輸送船「マーマレード」が、静かに、それでいて尊大に佇んでいる。

少女が周りの人間に気を配っているのを見て、刹那も辺りを再び警戒し始めた。

さっきの彼女の言葉……。

自分が必要としているモノ、と言っていた。今の所、刹那自身何を欲しているのか、モヤモヤした何かに邪魔されて分からないのだが。

それでも、彼女の言葉には信じてみる価値がある。それがこの状況を打破する「道しるべ」となるなら。

忙しなく動く技術者の目を掻い潜り、階段を駆け上がって輸送船の入り口へと走る。

途中で何度か気付かれそうになったが、それらは刹那が静かに気絶させてその場に寝かせておいた。

「ハッチの前までは来ることが出来たが………」

「任せて」

彼女が指紋認証のパネルに手を当てると、大きな古臭い機械的なハッチが上に開いた。

勿論決して静かではない音も鳴ってしまったので、周りの人間も不審がり始める。

しかし止まらない。

二人は駆け込み、少女が指示を出しながら刹那が彼女を抱かかえる。

少女の指さす扉の直前で、間が悪く警備兵に出くわしてしまった。いや、恐らく軍のパイロットか何かか。金色の髪と白いパイロットスーツ。刹那ほどではないが、癖毛という物だろう。

身長は刹那より大分上だ。

「何だね君は」

「通してくれ」

「答えになっていないぞ。軍人を目の前にして、ここを通せと言うのか」

何とも可笑しそうな表情をすると、真顔に戻って真剣な表情で刹那の瞳を見つめる。

それと、フードを目深に被った少女の眼も。

金髪の男は「ふむ」と腕を組んで両目を瞑り、暫し黙りこむ。すると、小さく笑って道を開いた。

「行きたまえ。この先に、何があるのか知っているのならば、な」

「良いのか……？」

「早く行け。でなければ、私は君の眉間に銃を向けなくてはならない。」

「……礼を言う」

刹那に抱きかかえられた少女が、通り過ぎ様にペコリと頭を下げる。

刹那の背中を後ろから眺める金髪の男性。数秒後に異変を感じた技術者たちが駆け付けて来たが、男性が追うのを腕で制した。

困惑の表情で、自軍のエースパイロットの顔を見る技術者たち。

「行かせてやれ。癖の付いた私より、彼のような若者が乗った方が機体も喜ぶ」

「し、しかしあれは我が軍の財産です！ 国宝と言ってもいい！」

「落とされたら私の責任にしる。宇宙漂流刑だろうと縛首刑だろうと受けて見せよう。マスラオを用意しろ。私も出る」

「ですが中尉！」

「今は上級大尉だ」

彼が何を考えていたのか。それは技術者たちには分からない。彼ら技術者が知っているこの男性は、とても”癖”だという欠点らしさを持ち合わせているとは思えないのだ。柔軟性があり、機転も利く。モビルスーツに無理をさせるのが少々難だが。

二人の若者が向かった扉を一瞥すると、金髪の男性はすぐさま背を向ける。

彼が求める、愛機の元へ向かうために……。

再度コロニーへ砲撃を行うため、砲身へ圧縮粒子を装填し続ける「ガンダム」。

正式機体名は「GN-008セラヴィーガンダム」。地球連合軍所属モビルスーツであり、オリジナルの太陽炉を有する一機だ。そんな世界に有数の太陽炉を持つ機体が、何故こんな田舎みたいなコロニーへ派遣されたのか。

理由は単純。イオリア・シユヘンベルグが「先導者」と呼んだ存在が、このコロニーに輸送された事。

そしてもう一つ。それは……。

「……チツ……センサーに反応。この速度は……ぐっ！」

下方からのビーム狙撃。

機体を後方に数メートルずらして避けたが、気付くのが少しでも遅れればコクピットが焼け焦げていた。

メインカメラが捉えたその先には……。

「疑似太陽炉搭載型モビルスーツ……しかしGN-X系列ではない………それにあのフェイス……!!」

再びビーム射撃。次は真正面からだ。

だが、そんな攻撃が通用する程、「ガンダム」は甘くない。

セラヴィーの正面に構えられたGNバズーカ?の砲身が二つに分かれ、二つのGNバズーカに変わる。

同時に機体全面へ、緑色の強固なGNフィールドが展開された。

それが赤い光を四散させ、周囲のデブリを破碎する。

気付いたときには敵は後方。こっちが機動性に欠けたモビルスーツである事を知っているような攻撃だ。

フィールドとビームサーベルが激突するスパーク音がコクピットにまで響き、赤い刃を持ったモビルスーツのパイロットは片目を瞑って操縦桿を前に押し出した。

「ここは民間コロニー「スロップヒル」! あなた方が求めるモノはありません!」

口調からして男なのだろうが、それにしても甘い声だ。そういう趣味の人間ならば、喜んで耳を向けるだろう。

しかし、

「我々是我々の脅威となる存在を破壊しに来ただけだ! そちらも分かっているのだろう?!」

袖の部分から取り出したビームサーベルを振るい、濃い青と白のカラーリングがされたモビルスーツへ叩き付ける。

自らのサーベルを横に倒してその斬撃を防ぐが、機体の出力が違
うので圧倒的に押されていた。

「先導者など、在ってはならない……………そう、兵器とされるぐら
いなら、本人だって死ぬことを望んでいる筈だ！」

「ッ！！ 彼女はそんな事望んでません！！」

もう一本のサーベルを取り出すと、青のモビルスーツはセラヴィ
ーの腹に向かって横なぎに斬撃を放った。

軌跡を残しながら進む刃の先には、既に目標となるモビルスーツ
はいない。

後方にゆっくり下がった巨体の「ガンダム」は、暫く様子を見る
ように隙だらけの状態で敵と対峙する。

（流石に、トランザムを行った後では危険か…………）

紫髪の少年が目をキツとさせると、最後に両膝と両肩のGNキヤ
ノン四砲門から一斉射撃を行った。青のモビルスーツは左腕の大き
なシールドを前方にかざし、そこから薄いGNフィールドを展開し
た。

全ての攻撃を吸収し切れず、機体がデブリに衝突してしまう。

「あ…………ぐ…………う……………ッ！」

思わず漏れてしまった言葉の先を噛み殺し、すぐさまモニターに
目を向けた。

そこには当然、標的であったモビルスーツの姿はない。

「逃がした、かな…………」

『ゼンセンシタゼ！ ゼンセンシタゼ！』

「そうだね。でも、倒せなかったら多分……意味が無いんだ……
……いや、こんな所で止まってちゃ駄目。コロニー内の敵機迎撃に向
かいます！ ハロ、ハイスピードモードお願い！」

『カットバスゼ！ カットバスゼ！』

背部には二基の兵装バインダー。右腕には現在後方に向けてマウ
ントされているGNバスターライフル。

ビームサーベルの柄を戻し、二基のバインダーを後方へ向けて大
量の赤いGN粒子を放出し始めた。

高速飛行を行う紫と白のモビルスーツ。

機体名「CB-001.5 1.5ガンダム」

コロニー側所属モビルスーツであり、”外宇宙航行母艦”兼”コロ
ニー軍所属要塞”「ソレスタルビーイング」にて製造された、疑
似太陽炉搭載型の名許り「ガンダム」である。

鼓動のコロニー（後書き）

さて、本編でも登場するキャラも色々出してみました。
まだ名前は伏せてますが、恐らく某乙女座の方はお分かり頂けた
でしょう。

御感想はお気軽に。欲しいだけですけど。

ではではゞ（。。。）ノ

胎動する巨人

コクピットに乗り込むと、そこは全く別の世界。空気が違うのだ。異質な空間に違和感を覚えながら、少女の言う通りにシステムを起動させていく。

そして、最終チェック。起動設定。

「ここに……手を……」

正面に正方形のパネルが現れ、レーダーのようにマスが一つ一つ輝いていた。

分かる。恐らくそれは、機体の搭乗者を登録する物なのだろう。力を手にする代わりに、モビルスーツという名の呪縛を受ける。まるで契約のようなソレを、

刹那は　　。

「名を、聞いていなかったな」

膝の上に座っている少女に、彼は静かに尋ねた。今そんな事を聞くべき時ではないと、誰だって分かる。けれど、今知っておかなければ、今これを聞かなければ、もう何も知れない気がして。

操縦桿を握る手には力が籠っている癖に、声には何故か脱力感が秘められている。そんな彼に……刹那・F・セイエイに、少女は告げた。

この先、いつまで共にいるか分からない只の少年に。

「フェルト………グレイス………」

答えてくれた事に感謝しながら、刹那は自らの右手を操縦桿から離す。まだ大人の男性と比べれば少し小さめな、その手を。

今から自分は戦うのだ。コロニーを襲撃した野蛮人を、無法者を倒す為に。

いや、

「駆逐するために………！」

天使が駆ける。

空を、この宇宙を。

輸送艦の外壁が開かれ、そこから飛び出すのは緑の光。

輝く星は軌跡を描きながら流星となり、このコロニーにオーロラを作り出した。

誰もが目を張る。争いの象徴であり、それでも美しく在るその存在に。

星がコロニーで瞬く数十分前、同じくして一組の男女が地下通路を走っていた。地上は戦火が渦巻いていて、人が呼吸を出来た場所ではないのだ。今はこうして外界から離れた場所を走るしかない。

それにしても、地下通路にはただの下水が通っていると思いきや、そうでもないらしい。度々整備がされていた様子もある。少なくとも、学校の廊下よりは綺麗だった。

「……ごめんねルイス」

「何で沙慈が謝るのよ。ちゃんと私を守ってくれたじゃない」

「……僕は……情けないよ」

ルイス・ハレヴィの右手を引きながら、彼は悔しそうに呟いた。自分に力があれば、彼女を守るだけの思いと行動力があれば……。何度悔んだって仕方がない。そんな都合の良い物が現れる訳がな

いのだから。

「見付けたぞ！ 女と男だ！！」

「男は殺しても構わん、撃て！」

足早に進んでいた二人の遙か後方。そこから聞こえた二つの声と十数の足音は、二人の鼓動を加速させるには十分過ぎた。

武装しているのかどうか、銃器を持っているのかどうか。そんな事を確認している暇はない。そんな事をしていれば、今現在進行形で放たれ続けている銃弾の餌食だ。

「走ってルイス！！」

「沙慈！！」

このままでは、追いつかれるのは時間の問題だ。どうにかして形勢を逆転させる材料は、状況は、道具は？！

だが、それは先程否定した物に分類される。都合の良い事など起こり得ないのだから。

しかし、

「な、きさ ！」

一つの悲鳴に連鎖する様にして通路に響いた悲鳴を聞いて、二人は必死に動かしていた足を止める。

ゆっくり減速して後ろを振り向くと、そこには何人もの兵士の死体をつまらなそうに眺める男性が立っていた。

「そうか……それは災難だったね」

沙慈とルイス。彼らを救ったのは、二人より少し背が高めの緑髪を持った少年だった。

名は聞いても教えてくれなかったのだが、どうやら軍事関係の間らしい。年はそう変わらないのに纏う雰囲気が違う。肌から感じられる空気だけで分かる。

彼が言うには、この通路の先にはこのコロニー唯一の大型隔離シエルターが在るらしい。

と言っても、既に使われずして一年近く経っているので、何が仕舞われているのか分からないのだとか。

何故そんな場所に向かうのかと尋ねてみると、軽く流されてしまった。軍人なのに、民間人である自分たちとの接し方は柔らかい物を持っている。

「このコロニーは第三次ELS戦より随分前に造られた物で、戦後に不要と判断された物資が色々と輸送されて来る、倉庫みたいな役割も果たしている」

「あ、それ、学校で習いました！　時々予想外な物が仕舞われているとか！」

「そう。だから、モビルスーツの一機くらい在るんじゃないかと思っ
てね」

「でも、軍人さんなら正式な機体に乗れば良いんじゃない……」

「残念ながら格納庫は敵機に爆破されてしまったんだ。元々外から
出入るモビルスーツしかこのコロニーにはないから、こうしてわざ
わざ地下通路を通って来てるんだよ」

そこまで告げると、少年は何かを感じ取ったように足を止めた。
目を一度閉じ、再び開く。

その様子は後ろにいた沙慈からは見えなかったが、どうやらただ
事ではないらしい。先程の柔らかい物が消えていた。

「どうやらこの通路も敵側が侵入してきたみたいだ。暫くすれば
モビルアーマーが襲い掛かって来るだろう」

「え……そんな、ていうか何で外の状況が」

「来る……沙慈……！」

ルイスの言葉と共に、少年は二人の手を引っ張って一気に足を速
めた。腕が千切れそうになりながら、それでも出来る限り自分たち
も足を動かす。

訓練を受けた程度でこんな身体能力を有せるとは思えない。けれ
ど、今は……。

「倉庫に辿りついたらキーを渡す。それを使って内部にあるモビルスーツを起動させてくれ」

「な、何を言ってる……」

足を止め、少年は沙慈の両肩を掴んでその真剣な眼差しを彼に向けた。

その両目に映っているのは、

閃光。輝く瞳に慄きつつ、沙慈は彼から目を離さない。

「いいかい、もう時間がないんだ、しかと聞いてくれ」

彼が言うには、もう少し先の曲がり角を曲がれば、直ぐ倉庫の先に出るらしい。そこに格納されているモビルスーツを、これから渡すキーで起動させて欲しい。それが彼の言葉。

モビルスーツが在るのを知っていたのだとか、そういう隠し事をまだまだ幾つも秘めているのだとか、そういう事を言う余裕など無かった。これから先どう動かなければならないのか。それをしっかりと頭に焼き付けられ、同時に金色の瞳の輝きをルイスに見せつけた。

それは記憶。

幾百に渡る歴史の歩み。

長き戦いの足跡。

記録されたデータが次々と頭の中に流し込まれ、それは許容量を超えた物であった。

気付けば倒れたルイス・ハレヴィを抱えさせられ、背中を押された自分がいる。

背中に響く爆音を噛み締めながら道を走り、ドアを開いて倉庫に駆けこんだ。もう彼はいない。生きていられる筈がない。

何故自分自身がここに来なかったのか。何故先程出会ったばかりの自分たちを生かしたのか。

ルイス・ハレヴィに何かを感じ取ったのだという事も知らず、沙慈・クロスロードは階段を駆け上がった。その先に待つのは、白い巨人。

自らの涙の理由も知らぬまま、彼は巨人の心臓に乗り込んだ。シートは冷たく、これから自分たちが何をしようとしているのかを知らしめるようで。

穴の空いた欠陥品となったコロニーの中で、少年はただ愛する人を抱き締めた。もう感じられる人肌は彼女しかない。気付けばそこは無重力空間で、涙は深海に浮かび上がる蛍のように煌めいていた。

会ったばかりの人間に感情移入をしているのは、自分だって同じではないか。

人は人が死ぬと悲しい。人は人だと認めた者が死ぬと悲しい。

「何で……皆死んじゃうんだよ……父さんも……母さんも……！！」

片手で目を抑えつけ、流れ出る雫が宙に舞う。

不意に、ふわりと頬に温かいモノが触れた。

「だったら、これから守りたいと思った物を守ればいいんだよ」

モニターが朝日の様に広がり、正面に生体認証モニターが現れた。そこにルイスが一度触れると、メインモニターが淡く緑色の光を伴いながら瞬く。

飛べる。

今の彼を感じられたのはそれだけで、とても簡単な感情が浮き出ているだけで。

無法者を退治する勇者になりたい訳じゃない。ただ今は、この少女を守る一人のヒーローでありたい。

恐怖は倒す。いや、

「……駆逐する、よ……！」

白いエイのようなモビルアーマーが倉庫の壁を突き破り、二人の乗ったモビルスーツに突撃して来る。

けれど、だけど、それは攻撃というには余りにも単純過ぎた。

両肘から光の刃を引き抜き、左右の挟みを貫いて爆散させる。向こう側は恐らく、何が起ったのか分からないだろう。雑兵が理解出来る速度を越えていた。少なくとも、従来のモビルスーツでは捉えられない。

「な……ガンダムタイプだと?!」

次の瞬間、既にモビルスーツはそのモビルアーマー、エンプラスに向かつて突っ込んでいた。

新たな光剣を両手に掴み、ブースターを吹かせながら両翼を叩き落とす為に剣を振り上げる。

しかし、向こうも馬鹿ではない。中心部分の大型砲門が開かれ、赤い光線が今にも放たれんと溢れ出ていた。

大型粒子砲が壁を食い破り、高熱で周囲の空間が熱波に包まれる。

「コロニーで、戦争をするなああああああああああああああ
あ!」

「ビームが効かないイ?!」

砲門をサーベルで貫き、下方に切り裂いてもう一方のサーベルで下から胴体を貫いた。

直後、爆音を立てながらエンプラスは木っ端微塵に弾け飛んだ。破片が外壁を傷つけ、弾かれたビームが焼き焦がす。

残ったのは白い巨人のみ。

ビームサーベルが真っ暗な空間を照らすだけ。

「ガン……ダム……」

メインモニターに映し出された文字と、気を失った少女を涙の消えた瞳で見つめながら、

彼は、おぼろげな空間で呟いた。

刹那・F・セイエイ

この名前は偽名で、出生を悟られない為である。

沙慈、ルイスと同じく、コロニー内にある当たり障りの無いスクールに通っている。

沙慈・クロスロード

姉と共にコロニー内に在る大きなマンションに住んでいる。因みに、隣の部屋は刹那、反対側はルイス。

経済特区からの出で、イオリア・シュヘンベルグの提唱した理論に興味を持って宇宙に出て来た。

フェルト・グレイス

輸送船で「スロップヒル」に運ばれてきた少女。

コロニー内を護送中に連合側のスパイから襲撃を受け、一人逃走中に刹那と出会った。

ルイス・ハレヴィ

一人で大きなマンションに住んでいるが、淋しいという理由で専ら沙慈の部屋に入り浸っている。

沙慈が宇宙に出ると知って、親に無理を言って宇宙コロニー「スロップヒル」にまでやってきた。

ティエリア・アーデ

連合側所属のガンダムマイスター。

乗機はオリジナルの太陽炉を搭載した機体「セラヴィーガンダム」で、圧倒的火力を戦場で振り撒く。

コロニーに穴を空けた後、1・5ガンダムとの戦闘後、離脱した。

グラハム・エーカー

コロニー側に所属するエースパイロット。階級は上級大尉とあるが、実質少佐扱いである。

乗機はマスラオ。

ニーニャ・ケルナー

1・5ガンダムのパイロット。階級は大尉。

普段は紅色の長い髪を後ろで一つに纏めている。

オリジナルの太陽炉を搭載した「セラヴィーガンダム」との戦闘後、コロニー内に残った敵機の迎撃に向かった。

かつて「GN-001ガンダムエクシア」に乗ってELSと戦った経験がある。

スペースコロニー

シリンドーのような形をした物が合計九つ存在する。

内界に広大な大地が広がっており、その上に様々な人工物等が建てられている。

スペースコロニー「ルミナス」

2304年に、第三次E.L.S戦の損害で崩壊してしまったコロニー。

E.L.Sとの戦いで疲弊し切った人類では補えきれない程の被害であり、失われた人命は数千万にも及ぶ。

スペースコロニー「スロップヒル」

軍事を殆ど持たない民間コロニー。

コロニー内に脳量子波研究施設が存在する。測定や観測をするだけで、軍事兵器を開発している訳ではない。

ガンダム

試験的に作り出された機体と名許りを除けば、第三次E.L.S戦に参加した「エクシア」「デユナメス」「キュリオス」「ヴァーチェ」の四機が存在していた。

全て他の量産、エース機を凌駕する活躍を見せ、人類側の勝利へと導いた。

現在は内三機をコロニー側が保有しており、残りの一機は地球側。太陽炉だけで考えると、三基がコロニー、一基が地球。残りの二基は双方に一つずつ存在している。

ガンダムエクシアNext

エクシアを改良した機体。

元と武装は殆ど変わらないが、新たにツインドライヴシステムが搭載されている。

二つのG.Nドライヴが織り成す高濃度のG.N粒子は、あらゆる機体をも凌駕する可能性を秘める。

武装

「GNソード改」

緑色の素材を刀身に使用した、新たなGNソード。

「GNビームサーベル」

後腰に二基装備する兵装。出力を抑えなければオーバーロードして自壊する。

「GNシールド」

実体盾。鋭利なフォルムをしており、これ自身でも接近戦を行う事が可能。

ガンダムルミナス

オリジナル機体。

コロにI側が第四次ELS戦が来た場合に備えて開発していた、完全次世代モビルスーツ。

アステロイドベルトで発見された金属を加工し、装甲として運用しているため、度々不可解な現象を引き起こす。

動力源はオリジナルの太陽炉No.006

武装

「ビームサーベル」

従来のビームサーベルと同じ構造の筈なのだが、刃の色が緑であったり、出力が不安定だったり、スペック上あり得ない事象を見せる。

両手首と両後腰に装備。主にパイロットの精神状況にて高低してしまう。

「ビームライフル」

GN-X?が持つビームライフルと同型。だが、上記のビームサーベルと同じく、やはり想定から逸脱した性能を持つ。

主にパイロットの精神的パラメーターに左右される。

「シールド」

初代試作オリジナル太陽炉搭載型モビルスーツ、「Oガンダム」に装備されていた物を流用したシールド。本来はフィールド発生機

関は設けられていないのだが、時折GNフィールドのような防御壁を張る事が有る。

「フェザー」

GNフェザーを搭載していた筈が、想定していた物と異なる現象が起きてしまった機能。

本来の緑色ではなく虹色の光を放ち、脳量子波の共振現象を引き起こす。

GN-X?

コロニー側の主力量産MS。

指揮官機と一般兵機では、カラーリングが異なる。

アヘッド

連合側の主力量産MS。

様々なバリエーションが存在しており、赤いカラーリングが特徴的。

セラヴィーガンダム

連合側が有する「ガンダム」。

砲撃戦に特化した、後方支援を主観に置いたモビルスーツ。

1・5（アイズ）ガンダム

ニーニャ・ケルナーの専用機で、名許りガンダムと呼ばれる。

総合的な火力面では本物の「ガンダム」を凌ぐが、粒子残量を気にしなければならぬ点を見ると、やはり劣っていると評価を受けている。

空を駆ける流星

空を駆ける。

本来なら絶大な重力が体を襲う筈なのに、このモビルスーツは驚くほど安らかだった。

「中枢機関に向かう高熱源反応が三。空中で交戦中の熱源が四……内二つが友軍信号………掴まっている」

こくりと頷くフェルトを見て、少年は操縦桿を思い切り前に突き出した。機体が巨大な推進力に包まれ、あっという間にコロニーの中核に向かっていったモビルスーツに追い付く。

通り過ぎざまに巨大な実体剣が最後尾のアヘッドを切り裂き、赤い光を散らせた。こちらの反応を感じし、振り向こうとした者も頭部にピンク色の光を突き刺され、胴体を上半身と下半身で真っ二つにされてしまう。

戦闘を飛んでいた指揮官機と思しき機体も、既にダルマ状態になっていた。

「これが……ガンダム……」

気付けば刹那の駆る機体はもう既に地上付近の機体を蹴飛ばしており、次に友軍機をビームサーベルで貫いているアヘッドを縦に真っ二つにしている。

『ば、化け物め……』

蹴飛ばされたアヘッドが体勢を立て直しながらビームサーベルを引き抜き、地上に接地したまま構えた。それを見た刹那もGNダガーを両手に構え、高速滑空しながらアヘッドに突撃する。

『地球を知らぬ蛮族共に、我々が負ける筈が ! ! !』

繰り返される斬撃を、左手のGNシールドで弾き返す。

既に勝負はついた。降伏の意を示せば殺すつもりはないが……。

『青いぞ宇宙人が!!』

右手のGNライフルを向ける姿を見て、刹那は人間の心を見損なった。

GNダガーをライフルの銃身に突き刺し、そのままコクピットを膝蹴りで押し潰す。

殺したいから殺したんじゃない。

殺さなければ殺される。このコロニーには守りたいと思う人々が大勢いる。学校の同級生だって、先生だって、皆守るべき対象なのだ。

もしもこの行為が罪に問われ、皆から責められたとしても恥じるつもりも悔いるつもりもない。

だから、彼は情けをかけない。

ぐったりとしたアヘッドを地上の道路に投げ捨て、メインカメラで周囲を見渡す。

モビルスーツ五機でこのザマだ。ここの警備は策なのだろうか？

暫く機体を直立させた状態で何をするか考えていると、通信申請がメインモニターに現れた。目の前には先程地上でアヘッドと戦っていたGN-X？の、生き残った側の機体が立っていた。

『いやー助かりました。ソイツ、昨日搬入して来た「ガンダム」でしょ？ オリジナルの太陽炉を見たのは、第三次ELS戦以来ですよ』

「すまないが、恐らく俺はお前の思っているパイロットではない」

『は、はあ？？ ガキの声……何で？？ ソイツのパイロットは「エーカー上級大尉」の筈じゃあ……もしかして盗んだのか？！』

「（エーカー……あの男か……？）残念ながら”この機体に乗っている人間の安全が保障される”まで降りる気はない。力づくでも良いが、それなりの対応はさせて貰う」

先程の格闘戦を見ているせいか、向こうは「うつ……」と声を出したまま向かって来る様子はない。こちらから機体コードを読み取ってみると、どうやら向こうのパイロットは「パトリック・コーラサワ」。階級は中尉だそうだ。

精々准尉程度のパイロットかと思ったが、どうやらそれなりの腕は有るらしい。

『安心したまえ。君と”その少女”に対して罪を問うつもりはないよ』

突然通信に介入して来たかと思うと、向こうのパイロットの顔が映し出された。モニター通信だ。

「お前はさっきの……」

『いやはや驚いた。モビルスーツの操縦経験があるとは思っていたが、まさかあそこまでの格闘センスを持っていたとはな。驚嘆に値する』

黒をメインカラーにした、鋭いフォルムを持つモビルスーツ。どこか従来の機体設計からは離れている物を感じさせる外見。

機体名は……マスラオ。まるで日本武人のような名称に、刹那は眉を潜めた。

『懐かしい機体ですね、エクシアですか』

今度は別の機体からの通信だ。モニターに映し出されたのは……紅色の髪を持った……少年？

少なくとも口調から感じ取れたのはそれだ。彼は後ろに纏めた長い髪を揺らしながら、モニターに詰め寄る。

どアップで映る可愛い風貌にたじろぎながら、モニターから目を離れた。フェルトは疲れた所為か寝ていた。

『あ……す、すいません。如何せん視力が優れていなくて……いつもはコンタクトレンズなんですけど、今日は偶然眼鏡で行動していましたから……。ヘルメットを取ってしまうと見えなくなるんです』

よ
『』

「そうか……」

余り興味なさうに呟くと、グラハムが高らかに笑った後に言葉を切り出した。

『降りろとは言ったが、流石にここでは無粋だ。住民の目に悪い。そろそろ退散するでしょう。着いて来たまえ。コーラサワー中尉。勇気ある我が同士の亡骸を頼むぞ……』

『は、はい！』

コクピットの中で敬礼をすると、胴体にビームサーベルを突き刺されて穴の空いたGN-Xを抱え上げるコーラサワー。その後ろには、民間人の避難したシエルターが在った。

あの機体のパイロットはアレを護る為の盾になったのだ……。

「勇敢だな……」

ポツリと、

自分でも気付かぬ内に呟いていた。

恐らく輸送船と思われる場所につれて来られた刹那は、二人の軍人と一人の少女と共にエレベーターの中で立っていた。

軍人の名は「グラハム・エーカー」、「ニーニャ・ケルナー」。ニーニャの方は偽名だと言っていたが……果たしてそれをばらしてしまつて意味が有るのだろうか？

グラハムの方はそれを知っていたようで、特に顔色の変化は見られなかった。

「さて、我々はこれから、とある艦と合流するつもりだ。それにはあのガンダムも乗艦させようと思っていたのだが……残念ながらアレには君の生体データが刻み込まれてしまった」

「……何が言いたい？」

フツ、とキザな笑いを見せる金髪の軍人に、刹那はムツと表情を強張らせる。

フェルトが後ろから袖を引っ張ったので、それ以上は糾弾せずに済む。

「何。簡単だ。君にも着いて来て欲しい」

「エーカー上級大尉！　こんな子供を……」

「まあ今は黙っていたまえ」

横に立つ少年を右手で制すると、彼は刹那の返答を待った。静寂に包まれる狭い空間で、一人の少年の思考だけを待つ。

すると、目的の階に到着した事を告げる音と共に、エレベーターの扉が開き、四人がそこから降りた。

「向こうに応接間がある。今は誰もいないであろうから、そこでゆっくり考えると良い。我々は会議がある。良好な判断を頼むよ」

そう言い残すと、グラハムとニーニヤは応接間と逆の方向へ歩いて行った。その後ろ姿を見届けると、とりあえず指示された通り応接間へと足を運ぶ刹那とフェルト。

二人程座れるソファが向かい合わせに置いてあって、その片方に二人が座り込む。

これからどうすれば良いのだろうか。やるがままに戦ったが、このまま戦いの世界に足を踏み込んでいいのだろうか。いや、

もう踏みこんでいる。それを分かった上で迷っているのか、自分
は。

なんて情けない。返り血を浴びる覚悟であるモビルスーツに乗ったのだ。悔いはない。だから、

成さなければならぬのだろう。あのモビルスーツが朽ちるまで、自分の戦いの人生は終わらない。

「ごめんなさい……」

「何故謝る？」

「私があの時、あなたに助けを求めたから……だからあなたの日常が……」

「……。いや、どちらにせよ崩れていた物だ」

それでも彼女は罪の意識を抱いたような表情のまま、ずっと俯き続けている。

刹那は呆れたように溜息を吐くと、こつんとフェルトの額を人差し指で突いて、不器用な笑顔で語りかける。

「むしろフェルトのお陰で俺はこのコロニーを守れた。礼を言うのはこちらだろう？」

ぶんぶんと首を横に振るうフェルト。そんな彼女を見ると、突然二つの足音が部屋に近付いて来た。軍関係の人間だろうか？
グラハムは何も言っていなかったが……それとも彼が帰ってきたのだろうか？

思わず刹那の手に自分の手を重ねるフェルト。刹那は全くそれを気にしていない。
姿を現したのは……。

「せ、刹那？！」

「な……沙慈？！」

見知った、親友とも呼べる少年だった。

空を駆ける流星（後書き）

完全に誰か確定するのですが、

ニーニヤの声は釘宮さんでsry

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7413x/>

機動戦士ガンダム00 ~ The Last Delta ~

2011年11月17日18時22分発行